

ります。果実を始めとする農林水産物には、人の心を揺り動かす何か不思議な価値が、間違いなくあるのです。

さて、安達町には智恵子の生家（造り酒屋）が保存され、隣接する記念館には、病床での智恵子の楽しみであった紙の切絵が展示されています。多くは花や野菜など身近な素材を写したのですが、その色鮮やかさに驚かされます。2人も登った背後に続く小高い丘は記念公園として整備されています。今年の8月に訪れた際は低く雲が垂れ込めた日で、安達太良山も、その上に出ているはずの「ほんとの空」も、残念ながら望むことはできませんでした。

（りえぞん No.4, 2001/9/28）

○ レモン市場の経済学

—— G. Akerlof “The Market for ‘Lemons’”
（The Quarterly Journal of Economics,
1970.8）——

野依良治・名大教授のノーベル化学賞受賞は久々の明るい話題です。「研究成果は論文で終わらせず社会で実用化させることが重要」との氏の言葉は、特に政策研究に携わる者には重みがあります。

同日、スティグリッツ・コロンビア大教授らと共にノーベル経済学賞を受賞したのが、今回紹介する論文の著者、アカロフ・カリフォルニア大教授です。

自由な市場取引により効用が最大化されるというのが経済学の命題です。無論、現実には独占や外部性の存在等によりこの命題が実現しないことが多いのですが、本論文は、仮に外部性等が存在しない完全競争市場においてもこの命題が必ずしも貫徹するわけではないことを、経済学の枠組みの中で最初に理論化したものです。

アカロフ教授は、米国における中古車市場に着目しました（レモンとは粗悪品の中古車を表す米国の俗語だそうです）。

市場には売り手と買い手が存在します。その中古車にこれまで乗っていた売り手は、当然ながら、その車の品質（良い車か悪い車か）を知っており、例えば良い車なら2,000ドル、悪い車なら1,000ドルでなら売ってもよいと考えているとします。一方、買い手の方は、的確にその品質を判断することが困難であるため、平均的な価格（良い車と悪い車が半々の場合は1,500ドル＝ $(2,000 + 1,000) / 2$ ）でしか買わないとします。

こうなると、売り手は1,500ドルより高い品質の良い車は市場に出さなくなり、それ以下の車だけが市場に流通するようになります。そうすると、今度は買い手の買っても良いとする平均価格も低下（例えば1,200ドル）し、そのために今度は1,200ドル以下の車しか市場に出回らなくなり、次第に市場には品質の悪い車（レモン）しか流通なくなります。このような過程を経て、結局、良い車の売り手は売ることができず、買い手は悪い車しか手に入れられなくなります。即ち、全くの競争市場であっても取引規模は縮小し社会全体の効用は低下するのです。

このような状況は、売り手と買い手の間で商品に関する情報に格差があることにより生じたものです。そしてこのような「情報の非対称性」が存在する場合に先に述べたようなメカニズムによって効用水準が低下してしまう現象を、「逆淘汰」（逆選択）と呼んでいます。

これらの考え方は、次第に保険等の分野でも重要性が認識されるようになり、現在は「情報の経済学」として経済学の重要な1分野を占め、多くの教科書でかなりのスペースが割かれています。現代経済学においては、完全競争＝効用最大化との考え方は、理論的にもあまりに単純素朴に過ぎるのです。

最後に私事で恐縮ながら、20年ほど前、学生時代に使った教科書には本理論は紹介されておらず、今春、当研究所で開催している研修を聴講して初めて知ったような体たらくで、今や常識となっている理論も知らず経済・産業政策に携わってきたことを恥ずかしく感じた次第です。

（りえぞん No.5, 2001/10/12）